

1

東大ゲバルト壁語録

“戦場”に残された落書きに見る夢

立花 隆

文藝春秋 1969 年 3 月号より

中核派の学生 150 余人がたてこもり、6 時間もの間激しい抵抗をした法学部研究室に入って、私は小さな落書きを発見した。

「ムー、会いたい／死んでもいいからもう一度だけ……／新宿西口でのお別れ／最後の tel / 夢の中 / …… / さようなら / 軽井沢 / 四月のスケートリンク / こけもも荘 / 小諸」

鉛筆の走り書きである。そのわきに、同じ筆跡で戦闘記録が残されていた。

「十八日 AM 六・四二，無事。正門前機動隊出現 / 八・三〇，無事。安田講堂催涙弾投下さる / 八・三十八，無事 / 九・十七も無事 / 十一・二十五，バリケード一部隊破る ML (註・向かい側の列品館の部隊) / 十二・一〇バリケードあやうし」

そしてもう一度、走り書きで、

「ムー、会いたい」

私は、ついさっきカメラの放列の中を、両手錠をはめられ、両側から機動隊に肩をつかまれて、法学部研究室から一人一人引きずり出された中核派の学生たちの顔を思い出していた。

彼がその中の誰であったかは知りうべくもない。あるいは、鼻血をしたらせながら、傲然とカメラをにらんでいたジャンパー姿の男だったのだろうか？ あるいは、放水で濡れねずみになった身体を、いつまでも小きざみにブルブルふるわせながら、じっと下を向いていたまだあどけなさを残す少年だったろうか？

アッ、死相が見える

私たちは政治を類によって語ることに慣れすぎてしまっている。類によって語りうるのはロゴスだけである。しかし、行動はパトスの所産であり、パトスは個別的にのみ語りうる。

私は彼らのロゴスにも、彼らに対立するロゴスにも聞きあきていた。政治のロゴスは、いつも紋切り型で退屈だ。私が知りたいのはむしろ彼らの肉体であり、彼らのパトスだ。その時発見したのが壁だった。外に向かつては類として語る彼らも、壁に向かつては個として語っていた。

私はメモ帳をとりだして、催涙ガスに泣きながら、落書きを写しつづけた。法学部研究室から列品館、安田講堂と、みるみる二冊のメモ帳が埋めつくされた。ロゴスではあれほど単調なモノクロームに見えた彼らも、パトスにおいては、驚くほど色彩豊かだった。

そこには、苦悩と誇り、懐疑と確信、自嘲と侮蔑とが、ごった煮のまま残されていた。まず、彼らが、いかに色濃く死の影に染められていたかを知らねばなるまい。

「貴女とのお約束、とうとう守れませんでした。これも全く機動隊のせいなのです。心に少々の悔いはありますけれど、闘って死ぬのも（この後五文字判読不能）」

「全世界の“飢え”たる者の叫びを、この東大に我が命とともに埋めん……（死のみが我に残されし唯一の再生であった——レオン・トロツキー）。昭和四十四年一月十七日、子の刻。機動隊討入のとき。ゲバラへの道を思い、孤独なるアナキスト記す」

「君もまた覚えておけ／藁のようにではなく／ふるえながら死ぬのだ／一月はこんなにも寒い／唯一の無関心で通過を企てるものを／俺が許しておくのか」

これを単に、彼らが「死」というヒロイズムの最高形態に酔っての言葉と解釈するならば誤りだろう。事実、死者はでなかった。しかしそれは、あの状況を考えれば、むしろ僥倖だったといえる。一人、二人の死者が出て不思議ではなかった。そのことは、いくら確率が小さいとはいえ、一人一人に死の可能性を突きつけていたのである。だからだろう。死を予期しているのか、生を予期しているのかわからないものもある。

「ユーチャン、渋谷でまた会う日まで……もう一度会ってから死にたかった」

「僕の遺書／さよなら／愛する女性よ／あの夜の楽しさに一時お別れします／（恋人の似顔絵）／素敵な彼女は僕の帰りを待ちつづけている／でも僕は帰れない／S44・1・17／キ動隊がやって来る！」

死の影は肉体にも刻み込まれていた。

「若杉&久野／それは幽霊みたいな少年だった」

安田講堂のフロントが立てこもった部屋の鏡には、黒いユーモアがあった。鏡面に、

「アッ、死相が見える」

よし肉体の死に見舞われずとも、彼らの全員が逮捕、拘留になることはまちがいがなかった。別れのことがいたる所に書きつらねられていた。

「京子／俺が帰るまで浮気するな／ジロー」

「けいこ／ぼくはあなたを少年が少女を愛するように愛している」

「マリコ／この最後の瞬間の気持ちに後悔など全くなし」

「彼女へ／僕は最後まで日和らなかつた／君がこの世にいる限り未練はあるが／革命のために生命をささげる」

多くが恋人にあてられている中であって、ただ一つだけ、

「いつも（一字不明）にする／お母さん／お父さん／いままでありがとう／MT」

あまりにも予期しない落書きに、写しとつても、しばらく目が離れなかつた。緑色のチョークで、急いで壁に書きなぐつたらしい。署名はMTともMJとも読めた。ML派がたてこもった列品館の二階である。恐らく機動隊がすぐ近くまで迫ったときに、これを書いて屋上に逃れ、階段に火を点けたのだろう。

毛沢東主義を奉ずるML派の落書きは、ほとんどが「毛沢東万歳」「造反有理」と毛沢東語録の引用だった。その中でこの落書きはあまりにも異質である。MTがこれを書くのは、相当気恥ずかしいことだったにちがいない。両親がこれを読んでくれる可能性はまったくない。それにもかかわらず、MTは切迫した危機の瞬間にチョークを走らせずにはいられなかつたのだ。両親のためというよりは、むしろ自分のために。

客観的有効性よりは、主観的願望をとげるといふ意味で、MTの落書きを書くという行為は、この闘争全体を象徴している。

どうせおいらは挫折者

安田講堂攻防戦において、戦術的勝利の可能性はまったくなかつた。物理的な力関係からみて、敗北は最初から明らかだった。それにもかかわらず彼らは、血を流して闘った。なぜか？ もちろん、戦略的勝利を信じてである。

「かけ値なしに東大闘争の勝利は世界階級闘争の巨大な一歩前進である」

「帝国大学東大を頂点として、全国学園闘争を勝ち抜き、七十年安保へと日本階級闘争の駒を進めよ」

「中核の部隊は最後まで勇敢に戦い抜くであろう。だが我々は玉砕の道を選んだのではない。我々の後に必ずや我々以上の勇気ある若者たちが、東大において、いや全日本全世界において、怒濤の進撃を開始するであろうことを固く信じているからこそこの道を選んだのだ。そうだ、我々はみずから創造的人生を選んだのだ／中核第二軍団第五小隊」

この確信が、彼らに生命を賭ける論理を与える。

「ぼくらにとって死とは、働く階級の全体的な歴史の中におけるものであり、そのことによって個としての存在が全体性を獲得し、自ら存在が生きるものとしての死である」

彼らは彼らの信ずる歴史に自分を賭ける。歴史が自分の味方であることを疑わない。

「ここにこのように歴史は我々の正義を証する！」

しかしどうだろう？ このドグマティックな信念だけが彼らを支配していたのだろうか？ 現実の歴史が、彼らの歴史観の正当性を検証するのは、気が遠くなるほど先の話だ。人はたかだか百年しか生きられない。一つの思想を検証するのに百年は短すぎる。とすれば、人と思想の間の可能な関係は、信仰だけである。

今書きとられた落書きは、その信仰のドグマの部分である。類としての信仰である。しかし、信仰も個別化され肉体化されるとき、さまざまの変容を生む。ドグマへの疑惑が、不安と苦悩にないまぜにされる。

「S44・1・18日、6・30 /自分はなぜ学生運動をしているのだろうか？ /革命、そんな事起るわけないよ！ /もうすぐ留置所へ行く /二度目はいやだ！」

破れかぶれになるものもいる。

「昨日『前衛』…… / 今日『自立』…… / どうせおいらは挫折者さ / もう暴れるだけだよ」

そして、おおい難い孤立感。

「連帯を求めて孤立を恐れず / 力及ばずして倒れることを辞さないが / 力尽くさずして挫けることを拒否する」

とはいうものの、

「人間を最も欲している者が / 何故最も非人間的に見られるのだろうか（革命までが んばろう）」

と自問し、

「我々は人にいやがられる“にわとり”であってはならない。夜明けを告げる美しい声の“にわとり”なのだ」

と自らにいいきかせ、

「労働者諸君 / 学生はここまでしかできない / 後は君達の出番だ」

と悲痛な叫びをあげる。

祭りと遊び

「闘争の中から生まれ育った天下の詩を欲しいよ！ / 闘争の中から生まれた人間の奥底の呻き / 極限の民族の血 / 俺の魂がわかってたまるか！ / たのむ！ / 詩を

くれ！」

それに応えるかのように、幾編かの詩が壁に残されていたが、あまり秀れたものはない。芸術の季節は行動の季節が終わってからはじまるものなのだろう。中で、幾つか拾ってみる。

「遠い朝を歩く／それは僕にとって／一つの苦痛な現実だから／一人で歩く」

「冷たい風が吹き荒れるとき／世はかぎりなくかわき／人の住む街は燃えあがる時を待つ／風の中にふるえる小さな炎よ／風の冷たさは」

「遠くまでゆく君のために／遠くまでゆくぼくのために／遠くまでゆく人達のために／樹樹の木の葉を吹きちらす／冬の嵐の中で」

「君よ、最愛なる君よ／いつの間にか愛していた／——（中略）——タバコの煙りの消えない今日は／ナイフの輝きを追えるだろうか／愛する君、この屋上（註・安田講堂の）からげ界を眺める日がいつかあるだろうか／遠い日よ、私を置いて去らないでくれ／戦いの昨日よ、私の前に立っていてくれ／星空よ私を振り向いて微笑んでくれ／暗闇の下に、いまツバキの花咲こうとしている／JY」

火炎ビンを投げた学生が、すべてドラスティックだったわけではない。こんな少女趣味も混在していたのである。

孤立感と孤独意識はやがてニヒルへの傾斜をたどる。

「Nihilist とは無意識的自意識過剰者に与えられた絶望的呼称。悲しき露西亜テロリストへの虚ろなる呼称。全ての自意識過剰者よ、自身自らの命を絶ちて、神の唯一の遊戯に初めて矢を放て——悲しき学生より」

“神の唯一の遊戯”とは、現存しているこの世界、あるいは個別的には人生と解していないだろう。ニヒルとは、あらゆる意味での神の否定である。

「天空を支配する神よ、おまえたちは我々人間を裏切ったのだ。真の言葉を奮い、はかり知れない人間の深淵に神人となった人間に残された唯一の真理は意志とリアリティ。神々よ恐れるがいい。今我々はおまえ達のくさりから離れ、反逆の旗をあげたのだ」

ニヒルはとめどなく深化する。

「絶望せよ。もっと深く絶望せよ」

「青年は廃墟をめざす」

そしてその極限にいたりつく。

「みんな死んじまえ」

「全部遊びだ……」

ニヒルの一方の頂点は殺意である。

「殺意なき者は戦列より去れ」

「俺が死ぬときゃ、機動隊も殺す！」

「修コロ、民コロ、ブッ殺す！ 全共闘」(註・修コロは修正主義者、民コロは民青)

「やるぞ、どこまでも！ /それが男の生きる道/男全共闘/角材手にし今日もいく
/民コロ、機動隊殺しに勇みいく」

ニヒルのもう一方の頂点は、すべての価値の否定から結果する遊びの意識である。

ニヒルのこの形態は、すでに我々現代人のすべての心をひそかに蝕んでいるのではないだろうか。安田講堂攻防戦のテレビ実況はオリンピックなみの視聴率をあげたという。口では「ケンカラン」といいながらも、心の底ではショーかページェントでも見る思いで、攻防戦の推移そのものを楽しんでいたことを否定できる人は少いだろう。

「Wie wenn am Feiertage? (アタカモ祭りノ日ノゴトク)」

「あたかも祭りの朝に/雷鳴の輝き(註・ガス銃、ヘリコプターの音のことだろう)」

祭りを感じていた人間が少なくとも二人はいるのである。祭りと遊び——その余裕が生んだことばの遊び。

「ローザの心は革命の心/おせばパトスの泉わく」(註・「指圧の心は母心……」のパロディ)

「昨日東大/明日日大/つづくゲバルト命をかけて/可愛いあの娘と訣別をして/
男命を革命にかける」

自嘲も含めて、

「とめて下さいおっかさん/背中の銀杏も笑ってる/女々しき東大どこへもいけない」

「全狂頭の大バカ」

女革マルは闘わず

価値の否定から、あらゆるものに侮蔑と嘲笑が浴びせかけられる。まず戦列を去った仲間に、

「(プラカードを持ったアヒルのイラスト。そのプラカードに) トウチャン、カア
チャンドウスル? オレ、オウチニカエツチャウ」

家庭の事情を口実に、機動隊導入の前に安田講堂から逃げだした者もいたのだろう。

「国際主義派全国委※名/ここに骨を埋めるぞ! /闘うぞ闘うぞ闘うぞシュー
ン……沈黙」

とりわけ革マル派への反撥は大きい。大部隊を擁している革マルは、法文二号館を守るはずだった。

ところが当日になってみると、たった十三名を残して、他は雲隠れ。その十三名も、大量の武器を蓄えていたのに、投石一つせず、アッという間に降伏した。

「男東大は闘った／女革マルは闘わず／古田、加藤は政府ブルの足／あなつかしき革命のない国」

「革マル粉碎／ことばの中に何があるのか！／常に初期マルクスから脱出せず／望みなし！」

民青、共産党への嘲罵が激しいのはもちろんのことである。

「民青バカ機動隊アホ／両方とも日本一のバカ／民青うじ虫粉碎」

「民コロ、機動隊の諸君頑張ろう／加藤代行」

「宮ケン官ケン粉碎（註・宮ケンは宮本顕治共産党書記長）」

「帝国主義を民主化すれば共産主義になる——日共（日共の民族民主路線への皮肉）」

機動隊には、

「（鏡に映る機動隊の顔の絵）猿が鏡をのぞきこんでも、そこにソクラテスはうつらない。うつるのはマヌケなサル顔だけである」

転じて自分たちを規定するとなると、

「蛤御門の変／久坂玄瑞死す！／赤門の変／新撰組—民青／幕府軍—機動隊／開国倒幕派＝／全共闘」

「我等遠方よりきて遠方に行く／蔵六は最後まで死ななかつた／影丸！！／カゲマル Bund」

白土三平の「忍者武芸帳」には、影丸にひきいられる影一族という反権力者集団が出てくる。影丸は何度も死ぬ。死ぬたびに影一族から新しい影丸が生まれるのだ。その影一族で最後まで死ななかつたのが蔵六である。Bund とは社会学のこと。

ハンマーもったドンキホーテ

さて、最も激しく嘲笑の対象となったのは法学部の教授連中である。加藤総長代进行を筆頭に、次々にやり玉にあげられる。

まず、加藤代行、

「義兄弟／日大古田＝東大加藤」

「加藤さん、この部屋に限り徹底的に破壊させてもらいます。理由は最早いう必要はないと思います。あなたはとうとう右翼の本質を表わしましたね。日大の古田でもできないことを、よくやってくれた。マツ殺す（以上全文の上に赤インクのシ

ブキ)」

「加藤先生万歳／日本愛国党／加藤先生の弾圧に感謝の気持／『まんまんちゃん！
／あっん！』（意味不明）」

近くの鏡に、

「加藤、お前の顔をこの鏡でよく見ろ。そうだ打倒される帝国主義者の顔だ」

平野竜一教授、

「日共の御用学者。スターリン主義のインチキゲンチャ」

辻清明教授、

「安全地帯のこちら側から横目でものをいう。中間主義でもなおかつ文句たらたらの御用学者」

坂本義和教授、

「朝日ジャーナルでめしを食う」

丸山真男教授、

「人気絶頂／かっこいい」

「三バカ大将／丸山真男／佐藤栄作／ルーキー新一」

「あんさんには縁もうらみもおまへんが、渡世の義理というやつで（破壊するの意か）」

「私の考える社会主義への移行というものはその社会の価値体系、信念体系の質的転換がなければ社会革命とはいえない——丸山真男の発言」

質的転換に傍点が打たれているのは、彼らこそその質的転換をはかっているのだという自負のあらわれだろう。丸山教授は、破壊された研究室を見て、

これを文化の破壊といわずして、何を文化の破壊というのだろうか

といったと伝えられる。まさにその通りだろう。しかし、文化とは価値体系のことであるから、丸山氏のロジックに従えば、彼ら“革命家”は当然のことをしたまでだということになる。

体系全体はともかく、少なくとも、暴力の価値という点に関しては質的転換が見られる。

「豈有暴力屈理性寧使理性屈暴力（アニ暴力ノ理性ニ屈スル有ランヤ、ムシロ理性ヲシテ暴力ニ屈セシメヨ）」

「悪魔もよりつかぬ静寂の中で／ドンキホーテは夢を見ていた／しかしぼくらは自己を主張するに不可欠な／ハンマーを見ている／反革命分子よ気をつけるがいい／血と肉をもった存在が今や／鉄槌なしには主張されえないのだ」

ドンキホーテがハンマーを持てば、ドンキホーテではなくなるというのだろうか。

反逆こそ生なのだ

「バリケードを守れ／革命は今ここで胎動している」

私にはハンマーを持ったドンキホーテの姿が目には浮ぶが、もう少し彼らの論理を理解しようと努めてみよう。彼らにとって、革命とは何なのか？

「革命は愛だ」

それは結構。だが、いかなる愛なのか？

「革命とは男が女を強姦するがごときのものである」

女も嫌いなことではない（民衆に善をもたらす）のだから、暴力ではじまってもいいのではないかということか。

「La charité serait-elle sœur de la mort pour moi

——ランボー（+マルクス）——慈愛モ俺ニトッテハ死の姉妹ナノダロウカ」

ランボー「地獄の一季節」の一節である。（+マルクス）となっているところが面白い。もとより革命の大義名分も *charité*（慈愛）にあるにちがいない。その慈愛も革命では“死の姉妹”だというのだ。私には強姦の相手を殺してしまうと、屍姦にしかならないのではないかと思えるのだが。“革命とは何か？”に対するもう一つの答え、

「僕らは生を渴望する、だから革命をするのだ」

これもまた結構。だがいかなる生をなのか？

「『生か死か』闘いの必然性はここ以外発生のしようがないじゃないか！ K・Iよ！問題は如何なる生かだ！」

と彼ら自身問いかけをくり返し、ある者がこう答えている。

「正に現代に於ては、“反逆”こそ生なのだ」

あるいは、

「存在の苦しさの中で真に生きるということは、闘いを通してのみ得ることができる」

なるほど、“反逆”と“闘い”が生で、それを求めることが革命なら、

「共産主義とは日々の否定である」

ということになるわけだ。ここからまたニヒルへの傾斜がはじまりそうな気がするが、まあ、そこまで信じているなら、もはやもう闘うことしか残ってはいまい。だが、*langer strebt*

「Es irrt der Mensch, so langer strebt（人ハ努力スル限り迷ウ）」

彼らにも迷いが生じた。闘いの前には、

「真黒に汚れた手の中に／ごそごそもぐりこむベッドの上に／ぼくたちは革命の夢
を見る／××××年／国会突入の後直ちに革命委員会結成」

といていたのに、電気を止められた暗黒の中で、一晩中放水をつづけられると、

「赤い氷のような／つめたいぼくの手の中で／革命が黒く沈黙した朝／酷寒の中の
白い息が／ぼくらの中に睡魔のベールをかぶせた」

もう疲れきっていたのだろう。

「我々は何も欲しない、ここにこうしているだけだ」

「何事の起こりしやは明らかならず」

ということばがでてくるのも、無理はない。

それにしても、と私は思うのである。

「いちまいの花弁からいくつの恋が占えるか、ためしてみたことがおありですか」

ということばを前にするとき、私はまだ彼らのパトスを数分の一も理解していないのでは
ないかという危惧から抜けでることはできない。